

論文の内容の要旨

論文題目「社会文化理論から見る日本語教室談話の研究―「自発的発話」とプライベートスピーチを対象に―」

学位申請者 加藤 伸彦

キーワード：社会文化理論，自発的発話，プライベートスピーチ，主体性，教室研究

本論は、社会文化理論（以下 SCT）の視座の下、技能実習制度の枠組みで日本語を学ぶ初級前半レベルの日本語学習者の日本語、および学習者の母語で発せられた、主体性に基づく自発的発話（以下「自発的発話」）とプライベートスピーチ（以下 PS）の質的な分類・分析を行ったものである。

1 章では、まず教育学および第二言語習得における教室研究の歴史を概観した。次に日本語教育における教室研究の歴史を概観し、その特徴として、研究が数多くなされてきていること、様々な理論・手法に基づいていること、質的な研究の割合が高いことを指摘した。続いて今までの日本語教育における教室研究で論じきれていない点、具体的には教室研究と教育学が結びついておらず、教育理論を基に教室研究の結果を考察した研究が少ないことを指摘し、SCT による質的研究を行うことでその点を補えることを論じた。

2 章では、まず SCT の歴史と要諦、特に、媒介、内在化、制御、発達の最近接領域の概要と、SCT の観点から見た第二言語学習における母語の役割を論じた。次に本論で論じる「自発的発話」と PS の先行研究をまとめ、その理論的根拠と第二言語習得研究における現況を論じた。

3 章では、1 章・2 章の先行研究の概観から導き出された本論における研究課題と、本論が採る研究手法を述べた。具体的な研究課題は次の 4 つである。1 つ目は学習者の日本語による「自発的発話」を分類・分析することで、その機能と使用される文脈、学習過程の一端を明らかにすること、2 つ目は学習者の母語による「自発的発話」を分類・分析することで、その機能と使用される文脈、学習過程の一端を明らかにすること、3 つ目は学習者の日本語による PS を質的に分類・分析することで、その機能と使用される文脈、学習過程の一端を明らかにすること、4 つ目は学習者の母語による PS を質的に分類・分析することで、その機能と使用される文脈、学習過程の一端を明らかにすることである。また、研究手法は、「自発的発話」と PS、およびそれらの発話から開始される談話を、話されている内容や場面に沿って検討する方法を採用した。

4 章では、調査対象の教室について記述した。具体的には、学習者、教師、カリキュラム、授業の進め方、技能実習制度の概要についてである。本論の協力者は技能実習制度の枠組みで来日した実習生 5 名と、彼らに日本語を教える教師 2 名、彼らが所属する監理団体であ

る。カリキュラムは詳細には指定されておらず、授業の進め方も協力者の教師がそれぞれ独自に考えたものであった。

5章では、日本語による「自発的発話」を分析した。まず、分析対象の発話の認定条件を検討し、参加的な「自発的発話」、詮索的な「自発的発話」、自律的な「自発的発話」、専心的な「自発的発話」の4種に分類した。続いて、それらの発話から始まる談話を個別に分析し、学習者は日本語による「自発的発話」を使って、主体的に協働的・共構築的に日本語学習のための教室談話を創り上げていることを論じた。

6章では、母語による「自発的発話」を分析した。まず、5章と同様に、認定条件を検討し、参加的な「自発的発話」、詮索的な「自発的発話」、自律的な「自発的発話」、専心的な「自発的発話」の4種に分類した。続いて、母語で行われた各「自発的発話」とその発話から始まる談話を分析し、言語や授業活動に関する問題の解決、精神的な支援による不安の解消など日本語学習に大きく貢献するものであることを論じた。

7章では、日本語によるPSを分析した。まず先行研究におけるPSの認定条件を検討し、3つの条件を満たすものを本論におけるPSとして認定した。次に、日本語によるPSの種類を個別に論じた。具体的には、まず先行研究のPSと同様または近いPSとして、読み上げ、コメント、モニタリング、選択的注意、リハーサル、操作を挙げた。次に、先行研究で提案されている代理応答と復唱の再考を行った。続いて、先行研究で論じられていないPSとして、想起のための手がかりと代理アップテイクを提案した。そして、考察ではPSが他者の反応を引き起こし、PSから談話、つまり精神間活動が開始されることを論じた。

8章では、母語によるPSを分析した。まず、7章と同じく、PSの認定条件を検討し、7章と同じ3つの認定条件を満たすものをPSと認定した。次に、母語によるPSを、他者発話の直訳、母語による読み上げ、理解の確認のための翻訳、理解のための翻訳、翻訳を含む理解の表出、目標言語の代替、問題解決のための思考の表出、自身の誤りに対する認識の表出、自身の理解を促すための思考の表出、自身の発話を導くための思考の表出、事物や事象に関する思考の表出、事物や事象に関する感情の表出の12種に分類した。そして、日本語によるPSと同じく、認知・メタ認知機能、社会・情意機能、自己制御機能を有するものであること、母語によるPSも日本語によるPSと同じく精神間活動が開始される契機となる機能を有することを報告した。

9章では、まずSCTの概念である媒介、内在化、制御、発達の最近接領域の4点から見た総合的な考察を行い、次に技能実習制度という制度的・社会文化的要因が教室談話に影響を与えた可能性を考察し、最後に研究結果からの日本語教育への教育的示唆を論じた。1つ目の社会文化理論の各概念からの考察だが、まず媒介では、教師のフィードバック・学習者の沈黙・「自発的発話」といった言動や、ノートに書かれた文字・パソコンやスマホに示された画像といった教室内に存在する物理的道具を介した情報などが、「自発的発話」の契機となっていることを論じた。次に、内在化では、2つの事例を取り出し、学習者が教室内の談話を通じて、日本語を習得していく過程を考察した。続いて、制御では、物的制御、他者

制御、自己制御の3種に分けた上で、物的制御としての機器の使用、他者制御としての教師のフィードバック、自己制御としてのPSの側面から考察した。最後に、発達の最近接領域では、発達の最近接領域に基づいた評価法であるダイナミック・アセスメントの観点から、教師のフィードバックを分析し、同じ種類のフィードバックであっても、誤用の日本語の難易度や学習者の学習経験などで、学習者ごとに与える影響が異なることを論じた。2つ目の技能実習制度という制度的・社会文化的要因が、調査対象の教室の談話の生成に影響を与えた影響だが、制度的要因として職場と生活で必要な日本語を学ぶという学習目的と1か月という学習期間を挙げた。また、社会文化的要因として同国人の存在、少人数クラスで技能実習生という属性が同じであること、カリキュラムの非存在を挙げた。3つ目の日本語教育への示唆だが「自発的発話」が行われる教室活動を創ること、必要に応じて学習者の母語使用を認めること、学習者がPSを安心して表出できる環境を創ることを提言した。

終章では、本研究の総括および今後の課題について述べた。今後の課題としては、1.「自発的発話」とPSの量的調査、2.「自発的発話」とPSに関する教師・学習者の心理面の研究、3 長期的観点から見た「自発的発話」とPSの調査、4 直接法と間接法という教室内での母語の扱われ方に起因する「自発的発話」とPSの質的・量的調査を挙げた。

(2999 字)